

倉庫をめぐる差役について

——明清時代における徭役と行政の関係（下）——

伍 躍

四、斗級と庫子の負担

- 1) 定額外の要求
- 2) 定額外の要求を生ずる原因 (以上本号)

四、斗級と庫子の負担

1) 定額外の要求

明代の史料のなかに、斗級と庫子に対し「重役」と呼ばれるものがしばしば見られる。重役というものは、徭役に服する負担も責任もかなり重いもののことである。

斗級については、負担発生の主な原因は穀物の保管である。斗級は、錢穀に関わるものであるので、錢穀の虧損耗折は、少くとも千百を越えるものであり⁽¹⁾、その責任の重さを見ることができよう。この他、倉を開き、兵士に糧餉を支給する時に、兵士らからのさまざまな要求にも対応しなければならない。成化十四年（1478）九月十四日、刑部尚書は次のように上奏している。「最近、調査したところによると、糧餉を支給する時に、各衛所の旗軍にいる兇惡な者は、支給された本色（糧、草など）に対し、一名あたり標準より三、五升あるいは一斗多く要求する者があり、支給される折色（布、絹、綿など）の布疋については布幅が広く、丈の長い物を要求する者があり、自ら勝手に選択する者もあった。官攢人らが少しでも従わないと、

(1) 『(萬曆) 杭州府志』、卷31、征役、13bページ
「斗級。錢穀所關、虧損耗折、動以百十計、累更不待

言矣。」

悪者たちはただちに兇悪の様子を出し、糧餉支給を担当する官撰人らを叱り、甚だしく暴行を加え、理由を捏造し、官撰人らを恐嚇し、人を害する。もっと兇悪な者は、甚だしく強引で、機会に乗り納戸の糧布を奪い、勝手気ままで気兼ねをするような様子もない」とある。彼は、たくさんの事例を報告している。例えば、甘州前衛の軍人楊郎兒らは甘肅倉に行き、折色布を受領する時に、該倉の撰典は公平に布三巻を出した。しかし、楊郎兒は倉内に入り、自らの選択することを強く要求した。監収判官韓贊は彼らの要求を拒否したところ、彼らは韓贊をあこれ辱め罵り、殴打さえしようとした。彼らはまた斗級を殴ったため、斗級は逃げてしまった⁽²⁾。清代には、次のような現象もあった。糧餉を支給する時に、兵士たちはさまざまのあら捜しをしたが、倉書と斗級は黙って我慢した。幸い、管倉家人が中間に立って勧慰したので、糧餉の支給はようやく無事に終えた⁽³⁾。また、ある管倉官員は離任する時に、自分の汚職行為を隠すために、倉にある麦の中に麦の殻四千石を混ぜ入れた。このため、支給する時になると、

兵士たちはほとんど反乱同然のあり様であった。後任管倉官は、このような麦の殻が倉にあることは必ず憂いになると考え、斗級たちに麦の殻を選別させ、倉外の道路に敷かせた⁽⁴⁾。これ以外に、上司のさまざまな要求を満足させなければならぬ。「昔、関係官庁は、どんなことでも、多寡にかかわりなく、すべて管轄下のところに要請した。その数目は原定の額と比べ、大きい差があり、民衆をひどく害するものになった」とある⁽⁵⁾。

このような状況は庫子に対しては、もっと強くあらわれた。官僚だけではなく、一般胥吏と差役夫も庫子にあれこれを強要する。「庫子という差役項目を設立した目的は、もともと庫蔵を見守るためである。この頃では物の提供を要求するようになり、およそ官庁の経費から官僚の私用までの色々な物を極力要求する。同僚の官吏らは更に模倣し遠慮せず、甚だしきには言葉もできないものもある。また、吏胥や門子、皂隸などの差役夫もさまざまな方法で、庫子を困らせる。ゆえに庫子を担当する人は官府に獲物と見られる。どんな豊かな家庭でも間もなく

(2)『皇明條法事類纂』上卷、卷16、邊倉敢有恃強結党歐(毆)罵官撰多支糧布搶奪財物枷扭一月充軍職官奏請例、417-419ページ

「成化十四年(1478)九月十四日、刑部尚書林等題為嚴禁約以警姦項事。戸部咨該巡撫甘肅等處都察院左僉都御史王朝遠題內一件、照得陝西甘肅等十一倉雖隸布政司管轄、緣俱坐落行都司所屬甘州左等一十五衛所邊城、通年撥運軍民屯稅鹽糧及運來官銀、動經數萬、專備各城旗軍支給、官民勞苦萬狀。近訪得各該衛所旗軍每遇官(關)支官糧、中間刁潑無籍之徒成群結党、遇放本色、每名多要三五升甚至一斗者有之、折色布疋務要寬長、任意挑揀者有之。官撰人等少有不從、輒起兇惡、百端辱罵、甚至欺打、捏詞恐嚇告害人。甚之恃強乘機搶奪納戸糧布、肆無忌憚。……甘州前衛軍人楊郎兒等赴甘肅倉關支折色布、及該倉撰典挨大均勻放出布三捲、楊郎兒強又去入廠內、要行入廠自行挑揀。有監収判官韓贊不從、輒將本官百般辱罵、亦要行打、及將斗級人等趕打躲走。」

(3)張集馨『道咸宦海見聞錄』(北京、中華書局、1981年)、78ページ

「滿旗八營每月分八日赴倉領米、……至放米日、滿營有一武弁率諸兵赴倉按甲支領、道(陝西督糧道)中備席一桌送倉、委員陪旗弁同食、八日皆系如是。遇桀驁旗人、種種挑剔、倉書、斗級忍氣吞聲、管倉家人從中勸慰、始得無事。」

(4)張集馨『道咸宦海見聞錄』、81ページ

「前任方用儀交卸時、子姪家人在雁塔買民間麥殼四千石摻入東倉、……余思此等麥殼存倉、終為倉患、因命斗級人等、將方任摻和之麥風篩淨盡、以好麥還倉、而以麥殼四千余石、鋪墊倉外低洼車道、……余不過賸貼方任虧空麥四千余石耳。」

(5)『(崇禎)義烏縣志』(日本京都大学撮影明崇禎13年(1640)刻本)、卷7、物土考、徭役、24a-bページ

「先年有司、事無巨細、費無多寡、咸取給焉。至與原定差銀數相什百、最為民害。」

破産する。庫子は一人あたり、工食銀十二両があるにもかかわらず、そのほかの禍害は庫子の破産を引き起こさせる」とある⁽⁶⁾。嘉靖四十三年（1564）、巡按御史陳瑞は調査の結果を報告している。「最近、関係官庁は庫子を鋪戸役として、花や絹や宴席などの煩擾があり、収納支出と賠償の苦情がある。他に公堂の拜見、用紙、皮革、下程（往来する官僚らを接待するもの）、及び各衙門の油、炭、椅子、机、日用果茶のようなものも、何でも要求する。そのため、大金持ちの家が、八、九百両の金を使っても、一年の労役の費用を満たせず、六、七年続けて働いても、一年分の差役も果たせなかった」とある⁽⁷⁾。萬曆年間、杭州府のさまざまな徭役のなかで、耳房、架閣、鋪陳三庫で働く庫子の負担は最も重かった。その原因について、『（萬曆）杭州府志』の編纂者陳善は次のように述べている。「そもそも耳房が初めて設けられたのは、ただ贓罰紙筭とその代わりの金を管理するからであった。謹直で、侵削せずに、職務をただちに果たせる。その後、経費が足りない時に当たった場合には、たびたび庫子たちに自分の金で取り扱わせた。少し負担に堪えないと感じたかも知れないが、この時には、自分の金で取り扱うことはあまりなかったのである。更にこ

うしたことをし続けて、庫子は負担に堪えなく、大変困難な状態が始まる。ただここで言えるのは、取り扱わせているものはすべて公家大計であり、これ以外には濫用しておらず、制限があったと言えよう。ところが、その末流に至って、公私を問わずに、要求があれば、ただちに追徴するようになった。このようなことで、民衆の資産を尽くさないということができようか。架閣庫で管理されるものは圖籍であり、とても易しい仕事である。上司は、架閣庫の仕事が易しいから、架閣庫庫子に茶房油燭火炬の仕事も担任させる。その初めはただ毎晚上司に蠟燭十本を供応し、お茶、お菓子、果物などを提供するだけであった。そのうちに、県衙で働く者は皆要求するようになった。提供する者は一家だけで、要求する者は百家である。これで架閣庫庫子はどうして貧困にならないのか。惜しむ者は固く提供しなかったりすれば、（要求する者は）ただちに風でその蠟燭を揺り倒し、お茶やお菓子などを汚した。庫子がかえって失職で罪に問われる。庫子にとって、架閣庫の労役は単に利益がないだけでなく、損失でもある。上にいる人はいったいこのことを知っているのだろうか」とある⁽⁸⁾。ここで見られるように、もともとの規定によれば、耳房庫庫子と架

(6) 龐尚鵬「懷時艱陳末議以垂法守疏」、『百可亭摘稿』（日本京都大学撮影清道光12年〔1832〕刻本）、卷1、21a-26aページ

「照得庫子之設、本爲看守庫藏而已。頃來責以供應、凡公堂百費及私衙日用、莫不刻意誅求。同僚各官吏更相劾尤、無復顧忌、甚有不忍言者。而吏胥門隸、尤百計苦之。故倉充庫子、即有司視爲奇貨、家累千金財不旋踵矣。查得庫子工食、每役編銀十二兩、而其流禍、遂至於破家。」

(7) 『（萬曆）重修常州府志』（日本京都大学撮影明萬曆年間刻本）、卷6、錢穀3、徵輸、22bページ

「近來有司以庫子爲鋪戸、有花段卓席之煩、有収支賠贖之苦。他如公堂拜見、紙革下程、各衙油炭、椅桌、日用果茶之類、無不取給。是以千金之家、費八九百、

不能當一年之役、累六七載、不能了一年之差。」

(8) 『（萬曆）杭州府志』、卷31、征役、12b-13aページ

「蓋初設耳房、惟俾司贓罰紙直、謹願無侵削即職舉矣。後當不給時往往令以己資辦具、人稍不堪累、然終償之未甚也。再後所辦皆不償、則始大困。而尚可言者、以所責辦皆公家大計、非此不濫用、尤曰有紀極云爾。至其末流、不問公私、有求輒取之、□□然欲無罄費產、得乎？架閣所職者圖籍、□易辦也。有司以易辦故、令任茶房油燭火炬。其始惟供長吏每夕燭十枝炬數、秉日煮香茗數罌、投以棗果足矣。既而凡役縣中者皆取給焉。供之家一而費焉之家百、奈何其不貧且困也。有吝惜者或拒不予、則風搖其燭、烈烈其炬、汚濁其茶品、而役者且以不治見罪、無益反損矣。上之人烏從知耶？」

閣庫庫子の仕事は比較的易しかったのである。この二つの倉庫は県衙の正庁の両側、あるいは正庁の近所に位置するから、上司はいつもこれを利用して、庫子らに必要な費用を前払いせずに規定以外の仕事をさせる。このようなことは初めて知県だけが行っていたが、以後県衙の各官僚、胥吏、ひどいことになると一部の差役夫（主に皂隸ら）も庫子に財物を強要するようになった。こうしたことは、彼らの負担力をはるかに越えている。上述のように、庫子と斗級の工食銀はもとより非常にわずかな収入であり、工賃の部分を除いて、倉庫運営の費用も含まれるものである。各方面からの強要されたために、工食銀は足りなくなったので、庫子らはやむなく自ら補填するしかなかった。龐尚鵬はかつて、「庫子の役を割り当てるところ、一人当たり銀ただ十二両であるが、費やされるのは銀五、六百両及び千両を越える場合もあった。斗級一人当たり銀ただ七両二錢であるが、しかし銀二、三百両を費やしてしまったこともあった」と指摘している⁽⁹⁾。

こうしたことは明代中期以後に非常に多発していた。比較的清廉潔白な官僚でも、同様の行為をしていた。彼らは、何でも強要するのではなく、「往来する使客を接待する酒食のため、あるいは錢糧の徴収に間に合わないから、庫子

からお金を借りて取り扱った。こうした借りたお金はあまり返されなかった」とある⁽¹⁰⁾。相対的に民衆の負担を軽減し、なるべくこうしたさまざまな強要を満足させるために、一部の地方で「朋編」の方法が試行されていた。これは、以前に一つの民戸に担当されていた差役を若干の民戸にさせ、則ち担当人数を増加させて、財物の提供を保証する方法である。例えば、南直隸揚州府儀真県には、嘉靖四十三年以前の「旧例」によれば、「県の耳房庫子は二名があり、この差は極めて重く、毎年徴発される二名は必ず七、八戸の民戸から割当たられて、銀七、八千両が必要である。およそ一切の名義もない費用、官衙の用度、衣服、飲食、饋送、往来折乾、私禮、門書、日用酒饌などはともにこの耳房庫子に取り扱わせた」とある⁽¹¹⁾。まさしく龐尚鵬の言うように、「もし庫子及び斗級等の役に当たれば、残りの時間を計算し破産を待つことがしかない」わけであった⁽¹²⁾。こうした原因の影響で、蘇州と松江地方で均徭を割り当てるに際し、斗級と庫子とは、長い間にわたって、「豪民」らがなんとかして避けたい「力差」に属していたものであった⁽¹³⁾。

2) 定額外の要求を生ずる原因

こうした状況の出現は地方官個人による原因

(9) 龐尚鵬「通便宜以蘇困苦疏」、『百可亭摘稿』、卷1、16a-20aページ。

「夫榜編庫子一役、銀止一十二兩、而費銀五、六百兩及千兩有之。斗級一役、銀止七兩二錢、而費銀二、三百兩有之。」

(10) 『江西省大志』（日本京都大学撮影明萬曆年間刻本）、卷1、賦書、62a-bページ

「其最病民、當金銀庫子。給服縣官輒傾家。蓋縣官諸費、取給於庫子。其廉者不至是、而過客治具酒食、或錢糧徵不及、輒令庫子借輸、不能悉還、雖廉或爲之。」

(11) 『（隆慶）儀真縣志』（上海、上海古籍書店、1981年、

明隆慶年間刻本影印）、卷6、戸口考、4bページ

「舊例本縣耳房庫子二名、差爲極重、每歲二名、必以七、八戸朋編、歲費銀七、八千兩。凡一切無名靡費、官衙用度、衣服、飲食、饋送、往來折乾、私禮、門書、日用酒饌、俱出本役。」

(12) 龐尚鵬「通便宜以蘇困苦疏」、『百可亭摘稿』、卷1、16a-20aページ

「如或點充庫子及斗級等役、即傾覆之期可計日而待。」

(13) 顧炎武『天下郡國利病書』、原編第六冊、蘇松、21bページ

「但丁田銀既輸于官、而庫子、斗給、解戸、禁子之類最爲民禍者、終不可得募。」

(表三) 徽州府の税糧総額

単位、石

	夏税（麦）	比率	秋糧（米）	比率
税糧総額	51775.40	100.00	120589.11	100.00
起 運	45900.00	88.65	103800.00	86.08
存 留	5875.40	11.35	16789.11	13.92

がもちろんあるが、もっとも重要な原因は明代の財政制度自体にあると思われる。中国古代における徭役制度は主に財政制度の補充として、存在していた。地方に財政の困難があるなら、地方官員らは常に徭役徴発の増加、あるいは差役夫への強要の増加という方法で地方の財政困難を解決した。こうしたことは地方財政のなかでとても顕著なものなのである。中国近世の地方衙門では、官員俸祿、衙役工食などに属する一部の経費以外には、いわゆる「地方財政」というものは、その概念さえ存在しなかった。例えば、衙門のなかで日常事務を処理するために必要とする紙は、経費で買ってきたものではなく、犯罪者から贖罪のために納められる「囚人紙笥」というものであった⁽¹⁴⁾。地方衙門にある一年分の経費は何の項目があったか、その経費はだいたいいくらであったか。明代嘉靖四十一年(1562)の徽州府の事例を取り上げて説明してみたい(表三)。

「起運」は徴収される税糧から、中央政府と

他の地方に交付する部分である。一方、「存留」は地方政府に交付するものである。徽州府の存留部分の米麦は銀に換算し、一万五千九百五十三両七錢七分である⁽¹⁵⁾。これはおそらく当地の主な財源であろう。こうした起運と存留の比率は、中国近世社会にわたって、ほぼ同じである。これに対し、徽州府の一年の財政支出状況はどうしていたか。史料によれば、地方財政の支出項目と財源は次のようなものである。

俸廩、「秋糧の内から出費する」。

祭祀、「均徭の内から出費する」。

郷飲、「均徭の内から出費する」。

収恤、「秋糧と均徭から出費する」。そのうちに、高齢者などを優遇する「月米」は秋糧から支給し、布衣などは均徭の公費から支給する。

公費、「当年の里甲丁糧及び均徭から出費する」。

供応、「当年の里甲は自ら処理する」。

樂育、「樂育院の田産から出費する」。

(14)『皇明條法事類纂』上巻、巻5、在外囚人紙笥有餘處准納鈔、109-110ページ

「天順八年(1464)七月十四日刑部尚書陸 等題為囚人紙笥等事。湖廣清吏司案呈、奉本部送刑科抄出湖廣按察司按察使羅虎(?)等奏、照得内外法司聽理詞訟罪人到官、不問輕重、悉令輸紙笥納入官公用。此雖今日之制、即周禮獄訟入鈞金束天而後聽之之意。查得内外問刑衙門原定納紙數目不同、且如湖廣按〔察〕司並分司等衙門每軍民納中夾紙一分、官吏生員舍人等在官之人俱納二分、每分俱一百二十張。本司日逐問過罪囚並

各道原囚囚犯支用餘剩紙張、俱送本司官庫收貯。近年以來、問過囚犯數多、紙張應用有餘。今查盤得收在庫大小紙張七十餘萬、每歲本司用紙不過六萬之上。通計前紙可備十年之用。況本司並無另造磚庫、止於西側房內收、則加以卑濕蒸沍黃軟、若不因時制宜、改納鈔貫、誠恐日後積累囚犯紙張愈多、新者恐致沍軟不堪書寫、舊者必致朽腐無用。」

(15)『(嘉靖)徽州府志』、巻7、食貨志、歲賦、49a-61b ページ

この七項目の支出はただ一般的なものだけであり、臨時と緊急情況に備える費用は含まれていないのである⁽¹⁶⁾。さて、ここから見られるように、税糧の存留部分はただ官吏教官生員兵士の給料と年寄りの月米を支給することしか満たすことができなかった。これがいわゆる「地方財政」の主な内容であると言えるかもしれない。ほかの各項目の支出はほとんど徭役によって解決されたのである。したがって、存留の税糧は地方行政のすべての要求を満足できなかったのである。一方、「供応」という項目のもとにある「使客廩給」と「鋪陳」の二つの項目については、支給する標準が決められただけで、その標準に基づく数額が決められていない。地方政府は当時の状況にしたがって、里甲に経費を要求する。あるいは、費用を出さずに里甲に仕事をさせる。ところで、筆者が既に指摘したように、官僚収入の一部分、いわゆる柴薪銀は差役夫から提供される代役銀によって支給されていたのであった⁽¹⁷⁾。

もし明代法律の規定を調べれば、上述の「俸廩」、「収恤」の「月米」、「樂育」を除いて、他の項目はすべて法律の規定に違反する。例えば、祭祀の費用について、明代では、「各司府州県で祭祀及び慶賀などが行われる時に、（費用は）ともに官府に属する錢糧から支給される」という規定が設けられている⁽¹⁸⁾。郷飲酒礼用の酒

肴の費用も「官府の錢糧から支出される」のである⁽¹⁹⁾。孤貧老弱を優遇する冬夏の布衣は、官府によって支給されるのである。「鰥寡孤獨の優遇について、本府は所屬する養濟院に支給すべき衣糧を、支給期限に従って、月一回支給する」とある⁽²⁰⁾。問題になるのは、明代では、上述のような関係法律と規定がすでに存在していたが、しかしこれらに対応する財政面の措置が整備されていなかったことである。地方官庁における日常事務の運営はほとんど財政困難のなかで行われていた。一部地方官のなかには、自分の柴薪銀、あるいは俸祿収入をもって、官庁経費の不足を補填するという場合さえもあったようである。例えば、明代の天順年間（1457-1464）、山東濱州知州何淡は、「自ら得った柴薪錢と馬夫錢を地方公務のために使っていた」とある⁽²¹⁾。ところで、実際に、このような褒めるべき方法をまねるのは非常に難しい。官僚の素質はさまざまであり、実際の収入も少ないので、こうした方法はあまり役に立たなかった。

明代中期から、一部の地方では、「均平銀」、「公費銀」の措置が取られ始めた。これらの方法は、一定の標準に従い、所屬する民衆に官庁の経費を割り当てるものである。その目的は、もちろん経費不足の解決を図るものである。徽州府の「公費銀」のなかに、「慶賀」、「科貢」、「公務」、「備用」らの四項目があり、総額は一

(16) 拙稿「明代の柴薪銀について」、『史林』、78巻4号、1995年、98-123ページ

(17) 『(嘉靖)徽州府志』、巻8、食貨志、歳用、21a-22aページ

(18) 『諸司職掌』、戸部、度支科、經費、雜支、18aページ

「各司府州縣遇有祭祀及慶賀等項、俱於係官錢糧內支用。」

地方経費の問題について、岩見宏「明代地方財政の一考察」(『研究』3号、1957年、72-78ページ)を参照のこと。

(19) 『(萬曆)大明會典』、巻79、禮部37、郷飲酒禮、1bページ

「酒肴於官錢均量支辦。」

(20) 『諸司職掌』、都察院、出巡、11bページ

「鰥寡孤獨、仰本府將所屬養濟院合支衣糧、依期按月開給、存恤養贍、毋使失所。」

(21) 焦竑『国朝獻徵録』(臺北、学生書局、1965年、明萬曆年間刻本影印)、巻103、貴州布政司左參議何公淡傳、18a-bページ

「得皂隸馬夫折薪錢、悉移公務。」

府六県あわせて2998.74両である。これらはそれぞれ里甲、あるいは均徭の方法を通じて、民衆から徴発されるものであった。この他、「供應」という項目に属する「上司使客廩給」、「鋪陳」、「夫馬」、「池州通運所供應」、「軍門供應」、「巡院供應」、「総督供應」らも里甲、あるいは均徭の方法を通じて、民衆から徴発されるものであった⁽²²⁾。

明清時代の地方官府には「収支計画」というものがなかった以上、「量出為入（支出をつもってみてそれに相応の収入をはかる）」、あるいは「量入為出（収入をはかり数えて支出を定める）」の財政観念に対し、一般官吏の認識は非常に不十分であった。上述の状況を見ると、もし地方経費不足の状況が発生すれば、官吏は常に徭役の方法を通じて問題の解決をはかったのである。徭役の方法は違法行為に属するにもかかわらず、しかし従うべき標準があり、特定される時期以内に相対的な安定した徴収数額も決められていた。これに対し、庫子、斗級など倉庫諸役の担当者に各種類の経費を強要することは、地方官吏が自分で状況を判断し全く独自に行うものである。このため、地方官は時間の制限と民衆負担能力の有無にも係わらず、かれらの欲望を満足させるまでなんとかして強要しつづける。こうした地方官庁の経費を強要するのに、なんらの法的な根拠も制限もないので、官吏はこの法律の「穴」を利用し、公務の需要を口実に、自分の私欲を満足させることもできる。こうした状況のなかで、斗級と庫子の身分は変わっていったようである。つまり、もとの倉庫を見守る差役夫から、地方官庁の一部雑項目支出の提供者

に変わったのである。庫子、斗級など倉庫関係の徭役項目が、明代中期以後によく「重役（負担が重い徭役）」と呼ばれる原因の一つがここにある。

ところで、第二章「斗級と庫子の徴発」で、徴発する時にただ工食銀を規定して、斗級と庫子のかわりに胥吏が実際の管理者として倉庫を管理すると述べた。こうした方法の目的は民衆の負担を軽減することにあった。しかし、実行されていくなかで、斗級と庫子らがかつて遭ったような状況も出てきた、つまり地方官が胥吏にもさまざまな費用を要求したのである。呂坤は次のように指摘している。「庫吏が一番重い差役であるのは、悪い州県官が、油、蠟燭、茶果及び官庁内のすべての費用を庫吏に取り扱わせるためである。上司からのさまざまな要求に対し、いつも早く満足させる。あるいは関係官庁は事務用紙などを前払うことを要求するという口実をもって、庫吏に強要する」。結局、負担が重すぎるので、庫吏の財産も蕩尽していくのである⁽²³⁾。

ここに一つの循環現象が見られる。地方の財政制度が整備されていないので、地方官庁の経費が必ず徭役制度を通じて、補填されざるを得ない。しかしもし更に不足が発生すれば、やむを得ず徭役負担者（たとえば差役夫、里甲など）、あるいは官庁の日常行政事務の担当者である胥吏に対する定額外の強要によって解決がはかられていた。こうした方法は明代の中期と後期において、あるいは一條鞭法の施行以前には、唯一の有効な方法であった。この方法は一定の時期以内に、地方政府の財政問題の一部をある程

(22) 『(嘉靖) 徽州府志』、巻8、食貨志、歳用、21a-23b ページ

(23) 呂坤『實政録』、巻4、治民之道、編審均徭、508ページ

「重差以庫吏為第一。何者？貪鄙州縣官、油燭茶果及衙内一切取用令之包賠；上司折禮辦程、動稱無礙；或偕口預支紙牘有司逼之、挪借庫吏。」

度解決できたが、歴史発展の視角から見ると、この方法は同時に国家と地方財政収入の提供者、つまり一般民衆の経済力を侵食しつつきてきた。その最終の局面には、民衆の破産と社会の動乱しかありえなかった。

清代の状況については、ここで清代初年における戸部による地方官庁の経費に関する上奏文が挙げられよう。「調べたところによると、布政司衙門に左右二布政使、經歷、照磨、都事、理問、檢校などの官員七名が有り、毎年の俸薪経費と衙役の工食銀はあわせて銀二千八百四十一兩くらいである。按察司衙門に按察使、經歷、照磨、知事、檢校、司獄などの官員六名が有り、毎年の俸薪経費と衙役の工食銀は一千七百四十六兩くらいである。一つの府に知府、同知、通判、推官、經歷、知事、照磨、又教授一名、訓導二名あわせて十名があり、毎年の俸薪経費と衙役の工食銀はあわせて銀二千六百七十兩くらいである。一つの州に知州、州同、州判、吏目、又学正一名、訓導二名あわせて六名があり、毎年の俸薪経費と衙役の工食銀はあわせて銀二千一十一兩くらいである。一つの県に知県、県丞、典史、又教諭一名、訓導二名あわせて六名があり、毎年の俸薪経費と衙役工食銀はあわせて銀一千八百二十一兩くらいである」とある⁽²⁴⁾。これは地方官庁財政支出の最低限にすぎないだろう。当時の規定によれば、下の官庁は常に上の官庁の一部の費用を負担すべきこととなって

いた。例えば、康熙年間においては、嘉定県一年間の支出する経費はだいたい銀二千四百兩があり、この県の財政は、本県官僚の俸禄以外に、巡撫、巡按御史、巡塩御史、学道、鈔関、督糧道、兵備道、知府、經歷、照磨などの官員の俸禄とこれらの官員に属する工食銀あわせて銀六百六十兩も負担しており、こうしたものは県の財政支出の三分之一を占めていた⁽²⁵⁾。実際、清代は明代と同じように、地方にいわれる「財政」というものはなかったのであり、大量の定額外の要求がなお存在していたのであった⁽²⁶⁾。もっとも、紙面に制限があって詳述できないため、この問題については、今後の課題として他日を期すこととしたい。

倉庫は錢糧を保管する場所であるだけでなく、地方官庁の行政事務にも関係がある。明清時代において、政府は以前の制度を引き継いで、全国各地で倉庫を建設し、倉庫を管理する官員と胥吏を配備していた。同時に、労役の方法を通じて（具体的に言えば均徭法を通じて）民間から差役夫を徴発し、倉庫に配置し働かせた。つまり庫子と斗級である。当時の法律によると、庫子と斗級は「監臨主守」であり、倉庫の管理に対しかなり重い責任を持っていた。中国伝統社会のなかで、官僚側は「民の父母」である地方官の国家行政中の重要性を強調しつつきたが、しかし、その目的は主に地方から安定的に税金

(24)『清世祖實錄』（臺北、華文書局、1964年）、卷84、順治11年（1654）六月癸未、26a-29aページ

「順治十一年甲午六月癸未 戸部奏：国家所頼者賦税、官兵所倚者俸餉、關係匪輕。……查布政司衙門有左右二布政使、經歷、照磨、都事、理問、檢校等官七員、毎年俸薪経費衙役工食共銀二千八百四十一兩零；按察司衙門有按察使、經歷、照磨、知事、檢校、司獄等官六員、毎年俸薪経費衙役工食共銀一千七百四十六兩零；一府有知府、同知、通判、推官、經歷、知事、

照磨、又有教授一員、訓導二員共十員、毎年俸薪経費衙役工食共銀二千六百七十兩零；一州有知州、州同、州判、吏目、又有学正一員、訓導二員共六員、毎年俸薪経費衙役工食共銀二千一十一兩零；一縣有知縣、縣丞、典史、又有教諭一員、訓導二員共六員、毎年俸薪経費衙役工食共銀一千八百二十一兩零。」

(25)『（康熙）嘉定縣志』、卷8、賦役下、49b-62bページ

(26)岩井茂樹「中国専制国家と財政」、『中世史講座』第六卷（東京：学生社、1992年）、237-310ページ

を徴収することであり、地方の財政制度に対する関心はあまり示していなかった。少なくとも明清時代には、健全な地方財政制度そのものは存在していなかったと思われる。地方衙門の行政経費を満足させるために、明代中期から徭役徴発を通じて収入を増加する方法が次第に登場してきた。しかしながら、社会の発展にともなう地方官府の行政経費は常に不足の状態をつづけていた。地方行政を維持するために、地方官吏らは、官庁で働き倉庫を保管する庫子と斗級に金あるいは物を要求する。こうした要求は法律の依拠がまったくなく、地方官個人の意志

でおこなうものである。数多くの庫子と斗級の担当者はこれによって自分の財産を蕩尽してしまった。そのため、当時の人たちは、倉庫関係の労役は破産への恐ろしい道と認識していた。したがって、国家体制の欠陥こそが広範な汚職違法行為を発生する根本の原因であると考えられる。つまり倉庫管理をめぐる労役の重い負担が生じる直接原因は、地方行政の実的需要に適應していない地方財政制度である。このような状況のなかで、徭役制度はただ単に労働力の提供ではなく、財政の面から行政制度の運営を支えていたことが見てとれよう。

